

ヌートリア 作物被害深刻

高い繁殖力 目撃情報急増



県内で近年、特定外来生物のヌートリアが急増し、農作物を食い荒らす被害が相次いでいる。本来は河川流域に生息しているが、琵琶湖があるため行動範囲が広がり、被害拡大につながっているらしい。県は2020年度から市町職員を対象にした研修などに乗り出す方針だが、生産者からは「被害は深刻。抜本的な対策を急いでほしい」との声が上がっている。

(松山春香)

県、積極駆除へ研修方針

「これでは商品にはならない」。琵琶湖の南湖に突き出た草津市の烏丸半島付近でレンコンを栽培してい

る鷹羽崇さん(47)は、ヌートリアに食べられ、黒く変色したレンコンを手に肩を落とした。ハス田の周囲には、ヌートリアのものと思われる足跡やしっぽの跡が多数残されていた。

ハスの群生地だった同半島はレンコンの栽培にも適しており、農家などでつくる事業所が15年から、湖水を使った「琵琶湖からすま蓮根」を生産。シャキシャキとした食感や甘みが人気

で、市の特産品としてブランド認証も受けている。鷹羽さんが異変に気づいたのは17年。収穫時期の11

南米原産の大型ネズミを除いた体長は50~70センチ、体重6~9キロ。稲や野菜を食べ、鋭い前歯が特徴。1939年スウェーデンから持ち込まれたが、戦後、野生化した。2005年に特定外来生物に指定された。

月から翌年3月にかけて、歯形や爪痕がついたレンコンが目立つようになった。最初は何の動物による被害か分からなかったが、18年5月頃、ハス田を泳いでレンコンを食べる姿を目撃し、ヌートリアと判明した。

市などに相談し、捕獲用のわなやネットを設置すると、1週間に1匹の頻度でヌートリアが捕まった。今も同様の対策を取っているが、被害は一向に減らない。事業所を運営する田中治嗣さん(62)は「生産量の10分の1ほどが被害を受けている。傷ついた部分は切断するため、大きいものを出荷できない。このままでは生産を続けられるのか不安だ。」

県によると、15年度まで10件以下だったヌートリアの目撃情報は、16年度に27件、17年度は30件に増加。18年度は99件と10倍近くに達した。それに伴い農業被害も報告されるようになり、18年度は122万円被害面積0.3(ハ)に上った。増加の背景には、ヌートリアが年に複数回、一度に平均5匹の子を産むほど繁殖力が高いことがある。

現状では鳥獣保護管理法に基づく捕獲で対応しているが、市町の申請や県の許可が毎年必要で駆除が効率よく行われていない。県自然環境保全課は「手遅れになりかねない」として、20年度、市町職員を対象に生態や対処法についての研修を開催。集めた情報をもとに対象や期間、区域、方法などを定めた防除実施計画を環境省に提出し、被害が顕著な市町が同計画を出しやすいうよう支援する方針だ。

計画が認められれば、捕獲許可や申請手続きが不要となる。すでに被害を見越して長浜市は11年、彦根市は19年に防除実施計画を環境省に提出、認定を受けた。

県内で目撃されているヌートリア。県提供。ヌートリアの被害(11月11日、草津市)。